

## 笑顔の印象形成に影響を及ぼす背景

### ーインドネシアの観念的文化についての考察ー

## Internal Culture and the Smile: The Study of Indonesian Culture, History and Values

北村伊都子

KITAMURA Itsuko

### 要旨

笑顔の印象形成に影響を及ぼす価値観は、どのように形作られるのだろうか。人間の顔の第一印象を形成する手がかりは、文化によって異なる (Todorov, 2017 中里訳 2018)。北村 (2016) は、訪日外国人(北米人・インドネシア人)と日本人を対象に笑顔の印象形成に関する準実験を実施したが、笑顔の真偽性や笑顔の口の開閉に対する印象形成について、国籍差がみられたと述べている。また、日本人と他の2ヶ国の研究対象者をサブグループに分け、重回帰分析を行った結果、北米人・インドネシア人は笑顔の真偽性に関わらず口の開いた笑顔を好む傾向があることが示唆された (北村, 2018)。加えて、国籍差だけでなく、各研究対象者が持っている文化的自己観 (北山, 1994)によっても印象形成に有意差が見られた。相互依存的自己観を有する研究対象者の方が、真の笑顔である *Duchenne-smile* を鋭く見抜いていることが述べられている (北村, 2019)。

そこで本論文では、このような笑顔に対する印象形成差の背景にある価値観がどのように形作られているのかを、研究対象者の国籍の1つであるインドネシアに焦点を当て、文化的・歴史的な観点から調査し、日本・北米との違いを比較しながら検討を深めた。

キーワード：非言語コミュニケーション、ホスピタリティ、文化的自己観

### 1. 異文化コミュニケーションにおける観念的文化の重要性

文化の定義として、岡部 (1996) は「文化とは、ある集団のメンバーによって幾世代にも渡って獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間・空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成」と述べている。この定義によれば、文化は主に私たちの頭の中に蓄積されている観念であるといえ、この観念に基づいて多くの物理的なものを作り出している (八代・町恵・小池・吉田, 2017)。この文化の異なる人々とコミュニケーションをとる時、人は目に見える文化(物理的文化)と目に見えない文化(観念的文化)の違いを初めて認識する。各自が有している観念的文化は無意識下に存在しているため、日常生活では当たり前のこととしてあまり重要視していないが、他の文化の違った当たり前に直面したとき、初めて自身にとって大切な文化であると認識される。この無意識下に存在する観念的文化こそが、笑顔の印象形成に影響を与えているのではないだろうか。

観念的文化を形作るものとして、八代ら (2017) は、ものの見方、考え方、価値観、行動規範などを挙げている。しかし、それぞれの文化は違いだけでなく、一番基本的なところでは人類として共通の部分もあると述べており、Carter (1997) の「文化の島」を示している(図1)。

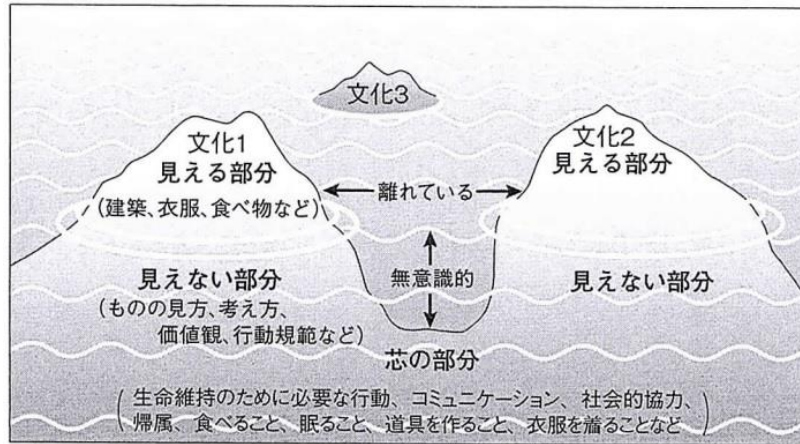


図1 文化の島(八代ら, 2017; Carter, 1997)

よって、本論文では異文化コミュニケーションの場面において、笑顔の印象形成に影響を与える観念的文化を形作る要素について、特にインドネシアの事例を中心に検討を深める。

## 2. インドネシアの概要

外務省 (2018)によると、インドネシアの国土面積は日本の約5倍の約192万平方キロメートルあり、人口はインドネシア政府統計の2015年データで約2.55億人である。「赤道にちりばめられたエメラルドの首飾り」とかつて呼ばれたように (村井・佐伯・間瀬編, 2013), 東西約5,110キロメートル, 南北約1,888キロメートルにかけて、約13,500の島々からなる世界最大の島嶼国家である (外務省, 2018)。



図2 現在のインドネシア共和国(インドネシア共和国観光省, 2019)

民族的には、人口の大半がマレー系であり、その構成はジャワ・スンダなど約300種族に大別される。言語は、インドネシア語を公用語としているが、各民族が独自の言語を有しており、現在インドネシア各地では583言語が存在する (インドネシア共和国観光省, 2019)。そもそも、インドネシア語とはマラッカ海峡周辺での交易のために用いられていたマレー語由来の共通語であり、オランダからの独立を目指した1928年の「青年の誓い」に使われたことから、インドネシア民族のアイデンティティを形成する要素として認識された言語である (村井ら, 2013)。

宗教は、イスラム教が約 87.21%と大半をしめ、次いでキリスト教 9.87%、ヒンズー教 1.69%があり、仏教・儒教などがわずかながら存在する（外務省, 2018; 宗教省統計, 2016）。国民国家としてのインドネシアが成立したのは 1945 年であり、それ以前はオランダによる植民地化・日本軍による占領を経験しており、民族・宗教・背景にある文化にも多様性に富んだ国である。

## 2-1. インドネシアの歴史

村井ら（2013）によると、インドネシアは、7 世紀後半スマトラに位置したスリウィジャヤ王国(仏教国)を起源とし、8 世紀に中部ジャワのシャイレンドラ王朝(仏教国)、13 世紀に北スマトラのイスラム国家を経て、マジャパイト王国(ヒンドゥー王国)へと発展した。しかし、当時はジャワ島中東部だけしか支配しておらず、今のインドネシアになるには更に時間を要した。1602 年にオランダ商船が訪れ、ジャワに東インド会社を設立し、以降約 300 年もの間、オランダの支配下にあった。その後、1942 年～1945 年の短い期間、日本による第 2 次世界大戦中の軍事占領下におかれ、インドネシアは過酷な支配と搾取を経験した結果、独立へと向かった。大戦後、スカルノが初代大統領になり 1945 年に独立を宣言したが、ここから再支配を試みるオランダとの間で約 5 年間独立戦争を行い、1949 年漸く独立が承認された。現インドネシアの最東端であるパプアがオランダからインドネシアに帰属したのは 1969 年の住民投票後であったが、実際にはこの投票はインドネシア軍による強い関与があり、「パプア人の表現の自由」が保障されなかったと国連監視団も述べている（村井ら, 2013）。

そもそも、はっきりとした国家としての領土が初めからあったわけではないインドネシアは、オランダや日本の支配を経験することにより被支配者として自覚し、独立を目指すナショナリズムが多様な民族の中に生まれたという歴史がある。

この多様な民族の統一を巧みに表しているのが、現在の国章ガルダ・パンチャシラ (Garuda Pancasila, 図 3) である。



図 3 ガルーダ・パンチャシラ(村井ら, 2013)

ガルダはインドの神話に出てくる伝説上の鳥であり、鷹のように描かれている。その翼は左右に 17 枚、尾翼は 8 枚、足の付け根の羽は 19 枚、首の羽は 45 枚であり、独立宣言を發した 1945 年 8 月 17 日を表している（村井ら, 2013）。パンチャシラとは、建国の 5 原則を意味し、「唯一神への信仰(全能の神への信仰ともいう)」「公正で礼儀正しい人道主義」「インドネシアの統一」「合議と代議制における英知に導かれた民主主義」「社会的な構成」であり、ガルダの胸の盾の図柄がその一つ一つを示してい

る。加えて、ガルーダの脚が捕まえているリボンには「BHINNEKA TUNGGAL IKA」と書かれており、これはジャワの詩の一節からとった「多様性の中の統一」を意味している。民族・言語・歴史・文化において多様性が見られるインドネシアにとって、この国章は国家統一のための意識づけを国民に投げかける象徴といえる（村井ら，2013）。

## 2-2. 宗教・教育

インドネシアでは8割を超える人がイスラム教を信奉しているが、国教とはしておらず、宗教の自由が憲法の上で保障されている。日本と大きく違う点は、国民が身分証明書に自身の信奉する宗教を記載しなくてはならない点で、無宗教は社会的にタブーに等しい（村井ら，2013）。

紀元前3世紀頃のモンゴル系のマレー人の移住と紀元前1世紀頃のインドとの貿易交流により、インドネシアにヒンドゥー教と仏教が伝わったとされる（インドネシア共和国観光省，2019）。先に述べたように、7世紀頃からヒンドゥー国家・仏教国家をへて、イスラム教は13世紀末にインドネシアに伝わり長期間にわたって浸透してきた。オランダ支配下にあった時には、オランダ側と衝突したイスラムの宗教学者（ウラマー）が追手を逃れて僻地に入り、礼拝所でクルアーン（コーラン）を教えたり、宗教塾を開いたりしたためか、現在でも権力者とは一線を画した自律的なイスラム団体が存在する（村井ら，2013）。

独立国家で明確な対イスラム政策が策定されるようになったのは1970年代以降であり、当時のスハルト大統領は国家としての立法と従来のイスラム法の整合性を図るため、ウラマーの協力を仰ぎつつも宗教が政治に関与するのを避けようとした（村井ら，2013）。1980年代後半には、古典イスラム法は現代社会の要請や現代人の価値観に合うように再解釈されるべきだという議論が展開され、インドネシアは穏健でリベラルなイスラム教の国として国際社会で認知されはじめた。一方で、若い世代のイスラム教徒がイスラムの教えに厳格に従おうとする動きも発生し、アラブ的なものが正しいイスラムであるという傾向も強まった。1998年の民主化の時代になると、水面下にあった「政治的イスラム」がイスラム政党をいくつも結成し、イスラム法をさらに法制化することを訴えたため、各地でキリスト教徒住民との対立が顕在化し、穏健派イスラムのイメージが急変した。しかし、1999年、2009年の総選挙をへて、イスラム系政党の支持率は落ち込み、イスラム教が政治に影響を与える気配がなくなった（村井ら，2013）。

一方、学校教育制度は2003年に施行された国家教育制度法が現行の制度の柱となっており、国家教育相が管轄する普通学校系統と、宗教省が管轄するイスラム学校系統があるが、相互の進学が可能であるため、違いはあまりない（村井ら，2013）。幼稚園に始まり、学校教育は6-3-3制であるが、義務教育は初めの9年間であり、高等教育は総合大学や各宗教の高等教育機関が存在する。高校の授業でも宗教の授業は必修で週2時間設けられ、各自が信仰する宗教にわかれて学習するなど、宗教に配慮した学びが提供されている。一方、国際競争に対抗できるグローバル人材育成のため、2003年から約10年間、各教育段階で少なくとも1校、国際水準学校が設立されていた。これは、インドネシア国家が定めた教育水準を満たしつつ、先進校の教育標準を取り入れた学校と定義され、バイリンガル推進のため、一定の科目は英語で実施されていた。また一般の学校でも一種の英才教育「速習プログラム」が実施されていたが、子供たちの間に差別化をもたらし、憲法の「国民の平等に教育を受ける権利」を守る観点から、2013年には国際水準学校は廃止された。教育において、インドネシアはまだ試行の段階にあるが、宗教教育を小中高のどの段階でも取り入れている部分が日本の教育との差異といえ、これが人々の持つ価値観に影響を与えている可能性がある。

### 2-3. ジェンダー規範

村井ら (2013) によると、インドネシアはイスラム教徒が 8 割強を占めるものの、女性の社会進出は日本よりもはるかに進んでいる。2000 年に「ジェンダー主流化」という男女格差を解消させる国家政策が大統領令として発効されたこともあり、民間企業で差別的待遇は存在せず、職場におけるジェンダー問題は存在しないといっても過言ではない。政治の分野でも、2001 年にはイスラム世界初の女性大統領メガワティ大統領が登場しており、2009 年の国会議員の女性比率が 17.9% を占め、日本の 11.3% のそれよりはるかに高い。教育についても男女の進学率にほとんど差がなく、2008 年の高校進学率は男性が 54.8%、女性が 54.6% であり、日本の 98% という進学率からすればかなり低いものの、教育における男女差がないことも見受けられる (文部科学省, 2011)。

この女性の社会進出を支えるのは、中産階層以上の家庭で雇われるハウスマイドである。澤井 (2016) によると、インドネシアでは古くから、特に家事労働を行う原住民(プリブミ)女性のことを *babu* (バブ) という蔑称で呼び、貧困・無教養・雇用家族に従属するといったイメージとともに認識されていた。1950 年代には、すでにインドネシア語辞書で「下女」という定義も現れている。独立後も *penbantu* (ブンバントウ: お手伝い) という呼称に変化したものの、*babu* のステレオタイプが持つ偏見を受け続けた (Sim, 2007)。しかし、1990 年代後半、女性家事労働者が多く海外に進出するようになってからイメージは変化し、働く女性の表現が TKW (Tenaga Kerja Wanita: 女性労働者) へと変化した (Huang, Yeoh, & Rahman, 2005)。この TKW の中には、帰国後、海外労働中の貯金を使って家や車を購入したり、起業をしたりするなど「成功者」として評価されるものもあられ、差別的な表現が公式な場面からはほぼ消えた。2000 年代後半には、TKW の権利意識が向上し「社会参加者」として認識され、人間として他者と対等に関係を保つ「つながりの平等」を持つことができる存在として認められてきている (岡野, 2012; キテイ, 2010)。

一方、家庭内での女性の立場は、イスラム教の影響が色濃く残る。1974 年の「婚姻法」には「夫は家長であり、妻は主婦である」と明記されていることもあり、妻は夫に従うものという意識が強く、相続権・離婚に関する妻の法的立場はかなり弱い。2004 年には法改正の機運が一時高まったものの改正には至らず、保守派とリベラル派の対立が顕在化している。

服装においては、他のイスラム諸国同様、髪の毛を覆うなど女性への服装規定が見られる (村井ら, 2013)。ただ、サウジアラビアのように厳しい服装規定を適用しているというのではなく、どちらかといえばコーディネート化され、ファッションブルで機能性が重視されたものが流行した結果、イスラム的になっているといえる。伝統衣装のクバヤも上着丈が長くなり、体の線は強調されなくなっているが、女性自身も快適性や機能性を重視して着用しているため、服装を制限されているという感は少ない (村井ら, 2013)。

### 3. 世界価値観調査にみられる価値観の違い

前述の様々な歴史的・文化的背景を踏まえた上で、インドネシアがどのような価値観を有しているのか、世界価値観調査 (World Values Survey) を参考にしてみたい。世界価値観調査とは、1981 年から 2014 年にかけて 5 年間隔で、100 ヶ国超、人口にして世界人口の 90% 以上を網羅する調査であり、異なる国や地域の人々の意識変化と、その意識が社会的、文化的、政治的变化に及ぼす影響を中長期的に捉え、世界規模で比較することを主眼とした調査研究プロジェクトである (池田編, 2016)。Inglehart (2018 山崎訳 2019) によると、人々の価値観と行動は、その生存がどの程度保障されているかによって形づくられ、人類は誕生以来、その歴史のほとんどで生存の危機にさらされてきた。しかし、経済先進諸国



では、第2次世界大戦後の世代のほとんどが生存は当然のことと思育ったため、世代間の文化的変化が広がり、人々の価値観や世界観がめりかえられている。物質主義的価値観から脱物質的価値観への変化が生じ、生存重視の価値観 (Survival values) から自己表現重視の価値観 (Self-expression values) へと変化したため、かつては経済と身体的安全・集団規範の遵守が最優先だったが、自分の生き方を自由に選ぶことが重視されるようになった。また、生存への安心感が高まれば、宗教を重視する価値観・信仰そのものが後退していく。社会の近代化により経済が発展すると、社会も寛容になり人間の幸福感を増大させるため、宗教による来世の保証で幸福感を増す必要がなくなるためである。その結果、近代化が進んで非宗教的な国の人は、近代化が進んでいなくて宗教が重視される国に住む人よりも幸福だという国際比較が見られる。一方、同じ国の中で比較すると、ほとんどの国で信仰の篤い人の方が信仰の薄い人よりも幸福であるという結果も存在する (Inglehart, 2018 山崎訳 2019)。本論文では、これら世界価値観調査の中から、伝統的・宗教的価値・自己表現価値・ジェンダーに関する価値を中心に、インドネシア・日本・北米の価値観を比較したい。

### 3-1. 伝統的価値と自己表現価値の違い

伝統的価値を重んじる人は信仰も篤く、国民としての誇りや権威尊重の意識が高く、加えて妊娠中絶や離婚への許容度が低い (Inglehart, 2018 山崎訳 2019; Inglehart & Baker, 2000)。その反対の価値観をもっているのが非宗教的・理性的価値を有している人であり、経済的に発展している社会に属する人ほどその傾向がみられる。また、生存価値を重要視しなければならない不安定な社会に身を置く人は、「一般的に男性の方が女性より政治の指導者として適している」「女性が満たされるためには子供を持つ必要がある」といった伝統的な制約項目により強く反応する。これに対し、生存への安心感が十分ある社会に属する人は自己表現価値を重要視し、生き方を選択する自由を尊重する傾向にある。以下の図4に、これらの価値観の世界分布を確認したい。

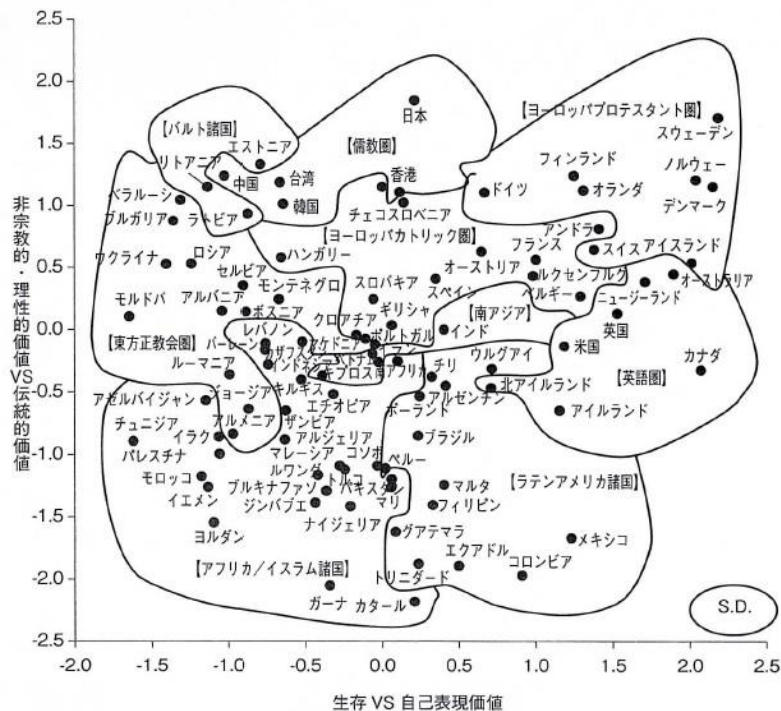


図4 2008~2014年(実査年の中央値は2011年)の世界カルチュラルマップ上における94ヶ国・地域の位置 (Inglehart, 2018 山崎訳 2019)

インドネシアは中の下の所得国に属するが、やや伝統的価値を重んじ、かつ生存価値を重んじる位置に属する。これはやはり国家として成立してからまだ日が浅く、国内での政治体制の確立の段階で多くの混乱を目にしてきた世代がまだ多く存在するからと考えられる。それに対し、高所得国に属する日本は、非宗教的・理性的価値を重んじているが、自己表現価値に関してはやや低い価値観を有している。戦後 60 年を超え、生存への安心感が十分根付いてもよいはずの日本で、自己表現価値が低い理由は、バブル崩壊・リーマンショックなどの度重なる不景気や、阪神淡路大震災・東日本大震災など多くの自然災害に見舞われたせいかもしれない。また、儒教的な価値観から同性愛への不寛容や男性上位的な発想が深く根付いていることも影響している可能性がある。その証拠に、同じように経済発展をしている台湾や香港、韓国、中国といった儒教国も、やや自己表現価値の数値が低くみられる。

一方、同じく高所得国である米国・カナダは、自己表現価値を重要視しているが、日本に比べ、非宗教的・理性的価値が著しく低い。どちらかといえば、数値としては、インドネシアと同等である。これについて、Inglehart (2018 山崎訳 2019) は、ジェンダー間の力関係や性行動を律する昔ながらの規範を、アメリカほどの経済の安定した国でさえもなかなか手放したがらず、妊娠中絶・同性婚・ジェンダー間の平等への反対が根強いことは明らかだと述べている。

とはいえ、2005 年を中央値としたグラフと比べると、日本はほとんど変化がないのに対し、インドネシアは伝統的価値が約 0.2 ポイント減少、米国は伝統的価値・自己表現価値が共に約 0.5 ポイント減少し、カナダは自己表現価値が約 0.3 ポイント増加している。近代的に社会が発展していくに従い、より非宗教的・理性的価値を重んじる価値観に文化的進化(cultural evolution)している様子がうかがえる。尚、図 4 の右下に描かれた楕円は、各国の国内における縦横の標準偏差の平均である。マップの大きさに対しその面積は小さく、それぞれの国内でのデータのばらつきは、どちらの軸でも回答者の 95%が 2 標準偏差以内におさまることを示している (Inglehart, 2018 山崎訳 2019)。

### 3-2. 国連ジェンダー・エンパワーメント指数の違い

国連ジェンダー・エンパワーメントとは、政治・経済・学術の分野で、女性がどれだけ高い地位についているかを反映する数値である (Inglehart, 2018 山崎訳 2019)。先進工業社会では、生存率が向上し高い出生率が求められなくなってきてから、女性に対し「生殖・繁殖規範 (Pro-fertility norms)」が求められなくなり、結婚・出産・職業の選択などに自分の行動を選ぶことができる「個人選択規範 (Individual-choice norms)」という価値観が重要視されていく。この個人選択規範で上位に位置する国は、国連ジェンダー・エンパワーメント指数も高くなる傾向にある (図 5)。

先に述べたように、インドネシアは女性の社会的活躍が認められているにも関わらず、北米・日本よりも国連ジェンダー・エンパワーメント指数が低い理由としては、この数値は大衆レベルの価値観を示しており、法制度がいくら整ったとはいえ大衆の価値観の変化には何十年もかかることを示しているといえる (Inglehart, 2018 山崎訳 2019)。

日本は、男女雇用機会均等法が 1986 年に施行され 30 年超経っており、インドネシアより 0.2 ポイントほど平均スコアは上であり、かつ個人選択規範についても寛容性が生まれつつあるのが見受けられる。それに対し、米国やカナダは国連ジェンダー・エンパワーメント指数が日本より 0.2 ポイント以上、上位にあり、かつ個人選択規範は最上位の北欧にせまる高ポイントを示している。これは、日本よりも早く高所得国になったこの 2 国において、世代間の人口置換がすすみ、個人選択規範・国連ジェンダー・エンパワーメントの指数の価値観の普及がある程度進んだからではないかと考えられる。

このように、各国の様々な価値観は数値で表されるくらい、はっきりとした違いを有する。もちろん同じ国内でも個人差はありうるが、それを超えるほど国家間の文化の違いは明らかである。

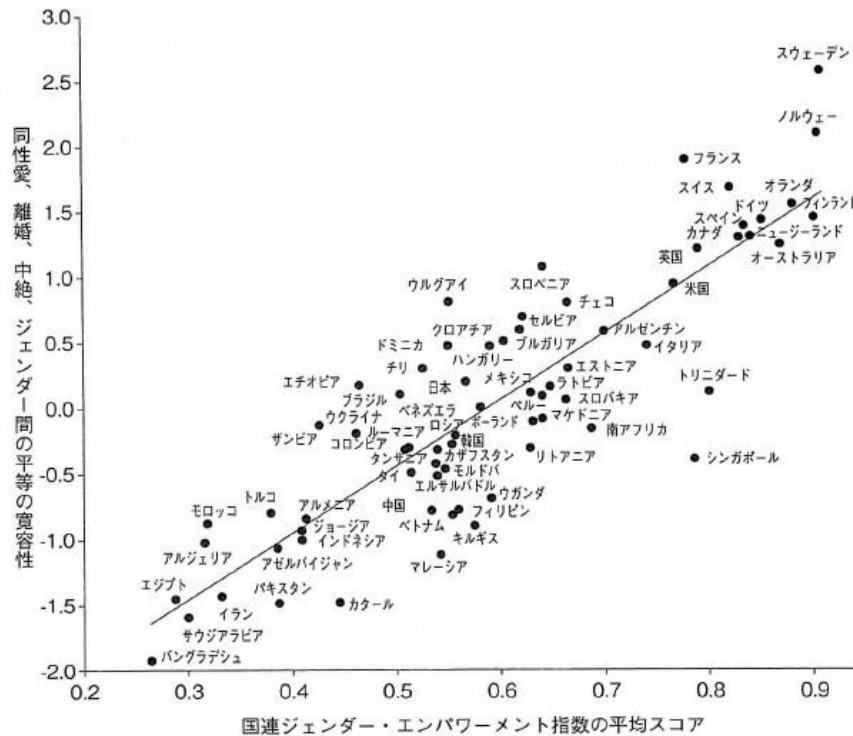


図5 各社会のジェンダー・エンパワーメント指数と個人選択規範の大衆支持  
(相関係数  $r=0.87$ ) (Inglehart, 2018 山崎訳 2019)

#### 4. 考察

北村 (2016, 2018, 2019) の準実験において、ホテルにおけるもてなしの第1印象をきめるサービス・エンカウンターでのホテル従業員の笑顔の印象形成について、研究対象者の国籍や文化的自己観による差が示唆されていた。国籍差については、当初、日本人とインドネシア人が同じアジア圏に属していることから、印象形成に関するいずれの結果も類似した結果が得られるのではと推察していた。確かに、真の笑顔 Duchenne-smile に対する表情印象は、予測通りアジア対北米という形にはなったものの、笑顔の口の開閉による表情印象は北米・インドネシアの国籍グループが同様の結果となった。なぜ、日本とインドネシアにこのような印象形成の差が生じたのか、その差異を生んだ背景について文化的・歴史的な観点を調査することが課題であった。本論文では、この背景を形作る観念的文化について検討を重ねた。

インドネシアは、地理的にはアジアの1国ではあるものの、歴史的にみるとオランダの植民地時代が約300年あるなど、アジア以外の価値観の影響がありうる事が判明した。また、宗教的にも仏教・ヒンドゥー教をへてイスラム教徒が多数の国になるなど、伝統的価値を形作る概念においても多様な宗教の影響を得ていることが示唆された。加えて、教育の部分においては2003~2013年の間、一部の生徒に対してとはいえ、国際水準学校といったグローバル化を視野に入れた教育が重点的に行われた時期があり、研究対象者の平均年齢から勘案して(2015年調査で、平均年齢35.21歳)、この影響をうけた人々が回答していた可能性が考えられる。また、世界価値観調査の結果に従うと、伝統的価値に対する価値観はインドネシアと北米2ヶ国は同様の数値を示しており、必ずしもアジアという枠で日本とインドネシアの価値観を縛ることができないことも示唆された。



インドネシアが今日の共和国の状態になってからまだ 50 年程度しかたっており、民族の多様性を維持したままの国家であることを考えると、はたして統一された観念的文化が存在するのか、疑問の余地が残る。また、Inglehart (2018 山崎訳 2019) が述べたように、価値観というものは世代間交代が発生して初めて少しずつ変化することもあり、ジェンダーや個人選択規範に関する価値観はこれからまだ変化することが予想される。

本研究の結果、サービス・エンカウンターにおける笑顔の印象形成について、インドネシアが単に地理的にアジアであるという理由で、日本と類似していると考えられるべきではないということが示唆された。日本政府は、2020 年に 4000 万人の訪日外国人を受け入れることを目標にしているが、本研究により、単なる地理的条件でアジアをひとくくりにして、日本人と同様の価値観を有していると思いついておこなうことへの危険性を見つけることができたといえる。インドネシア人旅行者への対応といえば、イスラム教徒への食事への配慮ばかりが目される傾向がある。しかし、その観念的文化については、民族的・宗教的な多様性から、他のイスラム国家と同様の対応のみに注視すると、顧客満足度を十分に得られない可能性がある。この点に留意したもてなしをすることが、今後の重要な課題となるであろう。

### 引用文献

- Inglehart, R. F. (2018). *Cultural Evolution : People's Motivations are Changing, an Reshaping the World*. Ann Arbor: University of Michigan  
 (イングルハート, R. 山崎聖子(訳)(2019). 文化的進化論—人びとの価値観と行動が世界をつくりかえる 勁草書房)
- Kittay, E. F. (1999). *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*. New York: Routledge.  
 (キテイ, E. F. 岡野八代・牟田和恵(監訳)(2010). 愛の労働—あるいは依存とケアの正義論 白澤社)
- Sim, A. (2007). Women in Transition. Unpublished PhD Thesis submitted to Hong Kong University.  
 2010. Transnational Sexuality among Women Migrant Workers: Indonesians in Hong Kong. In *as Normal as Possible: Negotiating Sexuality and Gender in Mainland China and Hong Kong*, edited by Ching Yau, pp. 37-50. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Huang, S. , Yeoh, B. S. A. & Rahman, N. A. (2005). *Asian Women as Transnational Domestic Workers*. Singapore: Marshall Cavendish Academic
- Todorov, A. (2017). *FACE VALUE: The Irresistible Influence of First Impressions*. Princeton: Princeton University Press.  
 (トドロフ, A. 中里京子(訳)・作田由衣子(監修)(2018). 第一印象の科学—なぜヒトは顔に惑わされてしまうのか? みすず書房)
- 池田謙一(編)(2016). 日本人の考え方 世界の人の考え方—世界価値観調査から見えるもの— 勁草書房
- 岡野八代(2012). フェミニズムの政治学 みすず書房.
- 岡部朗一(1996). 文化とコミュニケーション 古田暁(監)・石井敏・岡部朗一・久米昭元 異文化コミュニケーション 有斐閣

- 北村伊都子 (2016). サービス・エンカウンターにおける Duchenne-smile と非 Duchenne-smile が及ぼす印象形成の検討 梅花女子大学食文化学部紀要, 4. 1-29.
- 北村伊都子 (2018). サービス・エンカウンターにおける口の開閉による笑顔の印象形成の差異について 梅花女子大学食文化学部紀要, 6. 20-26.
- 北村伊都子 (2019). 文化的自己観と笑顔の印象形成の関係性について 梅花女子大学食文化学部紀要, 7. 1-8.
- 北山 忍 (1994). 文化的自己観と心理プロセス 社会心理学研究, 10(3), 153-167
- 澤井 志保 (2016). イェムじゃない—香港で働くインドネシア人家事労働者の「つながりの平等」による主体性— 東南アジア研究 53(2), 244-278
- 村井吉敬・佐伯奈津子・間瀬朋子(編) (2013). エリアスタディーズ 113 現代インドネシアを知るための60章 明石書店
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・吉田知子 (2017). 異文化トレーニング[改訂版]—ボーダーレス社会に生きる 三修社

### 引用 HP

- インドネシア共和国観光省 (2019). <<https://www.visitindonesia.jp/info/>> (閲覧日:2019年11月30日)
- 外務省 (2018). インドネシア共和国 2018年11月8日  
<<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/index.html>> (閲覧日:2019年11月30日)
- 文部科学省 (2011). 高等学校教育の現状 2011年11月10日  
<[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/main8\\_a2.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/main8_a2.htm)> (閲覧日:2019年11月30日)

### 参考文献

- Hall, E. T. (1976). *Beyond Culture*. New York: Anchor Press  
(ホール, E. T. 岩田慶治・谷 泰(訳) (1993). 新装版 文化を超えて TBS・ブリタニカ)
- Levine, D. R. & Adelman, M. B. (1982). *Beyond Language*. New Jersey: Prentice-Hall Regents
- 池田謙一(編) (2018). 「日本人」は変化しているのか—価値観・ソーシャルネットワーク・民主主義 勁草書房
- 大坪庸介 (2018). 英語で学ぶ社会心理学—Learning Social Psychology in English 有斐閣
- 馬淵 仁 (2010). クリテティーク 多文化, 異文化—文化の捉え方を超克する 東信堂